

なぜバーで「あちらのお嬢さんに一杯」が迷惑なのか①

客の立場からのバーの注意を「バーの十戒」として先に書いた。実はこの中で一番言いたかったことは「バーで女を口説くな。バーには口説き終わった女を連れて行け」の一文だ。読者であるあなたが、もし女性なら、男と女を逆に読んでほしい。

10年以上も前の話だ。銀座5丁目から8丁目の外堀通り沿いには「バー・オーチャード・ギンザ」「テンダー」「毛利バー」など個性的な有名バーが並んでいる。その並びの端、細長いビルの上に「エヴィータ」がある。9階にはこの店しかないから（ちなみに3階には「Be

「GASLIGHT EVE」が入っている）、エレベーターで9階のボタンを押す客が向かう先はみな同じだ。

あるとき、第4章で紹介したモルト大好き編集者Kさんと「エヴィータ」に向かうと、休日のホステスさんらしきふたり連れとエレベーターで乗り合わせた。「エヴィータですか」「ええ」と、互いに何軒目かでアルコールも入っている。話が盛り上がり、店に入るなりKさんが「このお嬢さんたちに2、3杯おごってあげて」とオーナー・バーテンダーの亀島延昌さんに声をかける。楽しく飲んでお会計。そのときに「あれ？ 普段より少々安くないか」とKさんが受け取る領収書を見て少し気になった。そして、後日。

「あの日の勘定ってレアなモルトを飲んだ割に安かったね」

「城さん、あの日、城さんたちに気づかれないように彼女たちといろんなサイン交換があったの気づかなかったでしょ」と亀島さんが笑う。

「サイン交換？」

「まず、彼女たちはこのお客様にご馳走になっていいか。大丈夫な客なのかと目で聞いたわけです。大丈夫と合図を送ったので、彼女たちも安心してご馳走になった」

「全然気づかなかった。さすが銀座のプロ同士だね」

「そして勘定ですが、彼女たちは城さんたちにご馳走になったから普段より安いはずと思って

いる。でも城さんたちに、もし彼女たちの勘定をそのまま乗せて、あまりポツタクッタと思われるのも店としては少々つらい」

「結局どうしたわけ？」

「その分の勘定は店が泣いたんです」

「えっ、それは迷惑かけた。ホントにゴメン」――。

と、実は話はこれで終わりではない。むしろ話はここからなのだ。

なぜバーで「あちらのお嬢さんに一杯」が迷惑なのか②

最近、若手のバーテンダー君ふたりと、飲みながらこのときの話をした。するとこう言われた。

「その話、ちょっと変ですよ」

「変って何が？」

「城さんがひとりですと店に来たならともかく、亀島さんは、編集者との打ち合わせの流れだと知っているわけですよ。つまり勘定は取材費のうち。そこで料金が多少増えても、その程度の金額で城さんたちがポツタクッタなんて思わないのは分かっているはずですよ」

「言われてみれば確かに」

「それに、もし店がそんな気遣いをしたなら、後になってわざわざ城さんにそのときの事情を打ち明けるかなあ……」

「つまり、どういうこと？」

「あえて言ったんじゃないですかね。バーでは『あちらのお嬢さんに一杯はとても迷惑なんですよ』って。絶対そうですよ。仮にもバー漫画の原作者に、そんなことを面と向かって言うのも城さんのメンツを潰す。だから遠回しに示唆した」

「確かに。以後、他のバーでも迷惑をかけちゃいけないから、どんなベツピンさんにも余分なお愛想は言わないようにしてる」

「だいたいですねえ。成り行きとはいえ、銀座のホステスさんたちが、城さんたちにおごってもらう程度の金額を喜ぶと思います？ 『エヴィータ』の常連らしいし、お店の顔も立てなきゃならないからイヤイヤご馳走になったんですよ。おごってもらったら愛想笑いの一つも浮かべなきゃならない。ホステスさんたちのせつかくの休みが台無しだ。亀島さんだって普段以上の気遣いをしなくちゃならない。あくあ城さん、サービス業のこと意外に分かってないなあ」

この夜、私は若手のバーテンダー君たちにボロクソに言われてしまったのである。

偶然知り合った美人さんたちを口説こうなどという下心があったわけではない。それでも酒

が入れば、美人を前につい不埒ふらちな本音も出てきてしまう。なぜバーで女性を口説いてはいけな  
いか。この「つい出てしまう本音」が問題なのだ。喜怒哀楽。それがなんであれ感情の本音を  
バーで表すのは美しくない。

「バーのカウンターは舞台だ。ここでは誰もが本音はグラスで隠し、無理な笑顔で背筋を伸  
ばしている。バーでは泣きたいときこそ笑え。泣きたいから泣かせろと言うならスナックに  
行け。バーは男がやせ我慢を学ぶ場なのだ」と、多分バーテンダーは口には出せぬから、こ  
んなときはチェーサーの水を黙って男の前に置くわけだ。「頭を冷やせお客さん」という想  
いを込めて。

では逆になぜ「口説き終わった女を連れて行け」なのか。女性なら男性が普段自分の知らな  
い姿をあえて見せるのは、自分に対する信頼と愛情と思うだろう。このとき、バーのカウンタ  
ーという舞台は、彼女にとっては「男の舞台裏」になる。こんなときならバーテンダーも精一  
杯にあなたを主役として引き立ててくれる。

今どきならこの設定が逆になることも多いだろう。恋人である彼女自身が通うバーに飲めな  
い男性をあえて誘う。ノンアルコールのカクテルを手に、ほろ酔い加減の彼女を見ればきつと  
美人に見えて惚れ直すに違いない。……と、これはオヤジの妄想だけど。それにしても、10年  
前の話を今さら亀島さんに確かめるのも恥の上塗りで、いつそう恥ずかしいので、あの日の真

相は謎のままである。全国のバーテンダーさんはどう考えるだろうか。